

に役立つ事を広告に出している。

歯科に用いる貴金属の製造に専門に関わる会社の出現は、歯科臨床の発展をもたらすことになる。金は夫々の必要に応じて合金とされ、Burnishingのための軟らかい金合金や一方硬質の金合金が要求された。19世紀には多くの金細工師が歯科のために仕事をし、その技術を応用した。

初期の頃、ウィーンの宝石商の3兄弟が、1895年にアメリカに移住し、Hugo Adolph や Julius Aderer がニューヨーク市で歯科用金合金の会社を起し、Aderer Bros. とした。金床、金ローを作り、歯科用の器具への応用や金冠を作り繁栄を見ている。

その後1912年にJelenko Co. がニューヨークに創業されたが、これはAderer Bros. にいた者が、後に起こした会社で、15年間歯科用金合金を製造し、1927年に独自に開発した品目を含むカタログを作っている。

J. M. Ney Company

近年金合金処理の一定の方式や、歯科への応用に関してNey Co. のWeinstein やHartfordに負う処が多い。Ney Co. では歯科に用いる金合金の発展に関する研究も多く、1906年には何カラットが良いなど金ローや金箔などにもデーターを紹介している。

I. Stern & Co.

I. Stern はニューヨークで1897年に歯科用金合金の製造を始めたことで知られる。製品は大きな金床、無縫冠によるSchell Crown Bridgeのロー着にも用いられた。1920年頃よりI. Stern はSammuel G Suppleeと一緒に各種のバー、wireを提供し、これらは義歯製作を一層発展させた。最近ではチタン、焼付ポーセレン、CAD/CAMシステムによるジルコニア等別の材料が用いられる様になっているが、金および金合金が歯科の臨床の発展を支えた事は間違いない。

3) 咬合接触点の考察の歴史

A History of considerations on occlusal contacts

東北大学 永田 和弘

Kazuhiro Nagata, Tohoku University

中心咬合位における上下歯牙の咬合接触は多くのテキストの間で微妙に異なっており、極論すれば大臼歯の機能咬頭是对合歯の中心小窩に納まること以外は百家争鳴の状態にある。しかし、大別すると、下顎の機能咬頭が上顎の辺縁隆線に咬合することについては、多くの学者が一致しており、あとは上顎小臼歯の機能咬頭が同名対合歯の辺縁隆線と対合する咬頭対辺縁隆線のグループと、咬頭対遠心窩に対咬する咬頭対窩のグループとに分かれる。咬合接触の研究において歴史的な経緯について調べてみた。

画像による咬合接触点の説明は、Turner (1907) のPeesoによる咬合面接触点の写真の紹介が最初であり、それは咬頭対辺縁隆線の咬合で、完全な1歯対2歯の咬合であることが示されている。Frielの咬合接触点(1927)は、ほぼTurnerと同じであるが、上顎小臼歯の機能咬頭が下顎同名歯の遠心窩となっている。このTurnerとFrielの咬合接触様式の二つの流れが以降の始原となった。咬合接触点の考察の歴史として大きな潮流としては次の3派がある。

- Turner 様式: Schuyler (1935), Posselt (1952), Lucia (1961), Ramfjord (1966), Lauritzen (1974), Wheeler (1984) 等
- Friel 様式: Gysi (1929), Guichet (1982), Santos (1985), Shulz (1995) 等
- 1歯対1歯様式: Stuart (1980), P.K. Thomas (1977)

咬合器の運動再現能の高度化と共に、接触点の規定もより厳密となった。C.E. StuartらはABCコンタクトという頬舌的バランスの概念や、EqualizerやClosure Stopperという前後的バランスの概念を提示し、咬合面と咬合接触を考えるうえで、大きな基礎が築かれた。オールセラミックの時代となり、補綴修復の上でも、破切予防の観点から、咬合接触点の重要性はこれまで以上に

強調される時代となった。咬合接触点の正しき付与により咬合の安定性を確立し、それにより補綴物のみならず身体の安全を図らねばならない。

4) 東京の都市形成と医療 (その1)

Studies on the Medical treatment and City formation in Tokyo

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

東京において、都市形成はいくつかの時期にわかれると考えることができる。始めは、江戸から東京へ移り変わる時期、東京が都市として成熟する時期、関東大震災から郊外化がすすむ時期、戦災より復興し高度成長をむかえる時期、経済活動の停滞により格差社会をむかえ階級都市として変化しつつある時期に分類されると演者らは考える。今回、総論的な立場から、東京の都市形成と医療の関係性について考察を試みた。

江戸時代、江戸は幕府が医師に対し統制を加えなかったこともあり、江戸は医師にとって自由開業の場所であった。幕府は、小石川養生所や江戸医学館で、無料診療を行ったり、江戸医学館において、開業医の技量向上のため百日講義を松平定信が行ったが、むしろ江戸時代を通しては、例外的であろう。当時、都市のみならず在村医家たちもある一定の人数は、存在していたようである。当時、医家を志す人の年齢もまちまちで、15歳位で入門し、10年位修行する人々や、上田秋成のように実家がつぶれてから、1~2年修行した後に開業した人までさまざまなタイプが存在していた。当然、開業医はある一定の薬代を払える患者層がいる場所でないとは生活は成り立たないのは当たり前である。このような背景を考えると医学の集まる都市は、江戸時代は京、江戸であり、特に古方派は京を中心にその活動をする事があった。華岡青洲のように都市を離れ、在村で活躍する医師もまれではなかったが、やはり学問の中心としては、都市が重要な役割を果たしたことは間違いない。

今回、関東大震災以後郊外化がすすむ時点に焦

点をあてて考えてみたい。明治初期、長与専斎らは、サナトリウムとして既に湘南地区に目をつけ、鎌倉海浜院を開業している。このような、健康の地としての湘南地区は、政府の高級官僚や政治家などを中心に、別荘地としての開発がすすんでいった。これは、関西圏でも、芦屋を中心として、健康の土地としての土地開発がすすんでいる。これを、より具体化したのが、阪急の小林一三であった。小林一三は、山梨県に生まれ(1873年)で、慶応義塾卒、三井銀行から阪鶴鉄道をへて、箕面有馬電気軌道に入社している。この会社は、梅田一宝塚、箕面及び宝塚一有馬温泉間に鉄道を通すことである。宝塚一有馬温泉間は実現しなかったが、それ以外は現在の阪急宝塚線である。沿線は人口希薄地帯で、そればかりか大阪一宝塚間には国有化の決定した阪鶴鉄道が走っていた。このため、小林一三は、池田に住宅街を作り、そこから大阪へ通勤客を運ぶ企画をたてたのである。その住宅地御案内には、大阪の「出生率十人に対し死亡率十一人強」を看板に、いかに池田の土地が健康にいいかを強調している。このことは、レッチワースを中心とした「田園都市」構想と連動している。健康というキーワードが、土地開発、電鉄経営と結びつき、公共輸送を民間が受けもつという体制は、この小林一三によりもたらされた。公共輸送を民間が受けもつという思想は、世界的には必ずしも一般的ではない。この後、小林一三は、池田に約三万坪、桜井に約八万坪、豊中に約四十万坪と住宅開発を行っていった。

一方これに対し、五島慶太は1882年長野県の生まれ、東京帝大を卒業後、農商務省、鉄道院を経て、武蔵電鉄に入社している。原武史氏は、「小林一三と五島慶太の違いは明らかであろう。まず第一に、小林が慶應一三井一阪急と一貫して「民」の世界を歩いたのに対し、五島は鉄道官僚という「官」からの天下りであった。」と述べている。とはいえ、五島慶太は、洗足、大岡山、田園調布の住宅地開発は、小林一三の追走であり、このことは五島本人も認めている。健康都市と同時に関東大震災以降、災害にも対応できる住宅地としてのイメージは、東京においても有効に働らくことになる。

しかし、東京圏において住宅開発に熱心だったのは、電鉄会社よりも学校であった。小田原急行